『西南アジア研究』No. 49, 1998

ハラブ史の中のライース達

谷口淳一

I はじめに

10－12世紀のシリア諸都市では，住民の中から起こった反政権の動きが支配者の交替を引き起こすなど，住民による政治活動がしばしば見られたことが知られている。そしてその主な担い手として，特にアフダース（*aḥdāṯ*）と呼ばれる集団と彼らを率いるライース（*ra'īs*）に関心が払われてきた。本稿は，北シリアの中心都市 Ḥalab（ハラブ，アレッポ）で活動したライース達の出自や動向を分析し，その地位の性質の変化を当時の政治史の中で捉え直す試みである。考察の中心となる時期は，ライースの活動が最も活発に見られた11世紀初頭から12世紀初頭にかけて，すなわちミルダース朝時代の最初からザンギー朝支配が始まるまでである。

アフダースやライースが本格的な研究の対象となったのは今世紀半ば以降のことである。まず Sauvaget がハラブのアフダースの存在を指摘して一種の民兵（*milice*）であると述べたが［Sauvaget 1941 : 96］，本格的な分析を試みたのは Ashtor が最初である。彼は主に11世紀後半以降の Dimašq（ディマシュク，ダマスクス）とハラブの事例に基づいてアフダースとライースについて検討した。対象を10世紀にまで広げた Cahen と Havemann の研究も，彼らの職務に関しては Ashtor の述べるところと大差はない[1]。

アフダース（*aḥdāṯ*）は「若者」を意味するアラビア語 *ḥadaṯ* の複数形であるが，本稿で論じるような意味では単数形の使用例は見られず，通常彼らは集団として史料に登場する。上記の諸研究によると，アフダースは都市内の治安維持や消火活動を任務とするとともに外敵から攻撃を受けた際には都市の防衛にあたり，さらに対外戦争に従事したり君主の護衛を務めることもあった。その一方で，住民と共に支配者に対して反乱を起こす場合もあった［Ashtor 1956 : 118－120 ; Cahen 1958–59 : 21－22 ; Cahen, C. "Aḥdāth." *EI*^{2} ; Havemann 1975 : 127－128］。なお，アフダースの人数としては，1,000人前後から3,000人という数字が挙げられている［大川原 1984 : 30 ; 太田 1986 : 35 ; 三浦 1994 ; 137］。

ライース（*ra'īs*）は「頭」を意味するアラビア語で，ある集団や組織の指導者という意味でしばしば史料に登場する。この時期のシリアで見られたライースは，アフダースを従え都市内の治安維持に責任を持つ存在であり，またディマシュクではワズィールを兼務した者もいる。同じくディマシュクではライースの財源として特定の税金が割り当てられていたこと

が知られている［Ashtor 1956 : 104－105, 108－109 ; Cahen 1958–59 : 23－24 ; Havemann 1975 : 135－137 ; Havemann 1989 : *passim* ; Havemann, A. et al. "Ra'īs." *EI*[2]］。

Havemann は，ライースやアフダースが属していた社会階層についてもかなり詳しく見解を述べているが，その根拠には曖昧な点が多い［Havemann 1975. : 114－116, 119－124, 130－133］。このことは Havemann の著書と同時期に出された Hoffmann 1975 についても言えることである。ライースやアフダースの活動に注目した研究者達の多くは，当時のシリア諸都市をヨーロッパの自治都市と比較しながら論じたり，ライースやアフダースの活動を名望家層と中下層民の協力と対立という図式で理解しようとした[2]。そのためこれらの研究は，ヨーロッパ中世都市に関して論じられてきた概念を，当時のシリア諸都市に当てはめようとしてきた観がある。そのため例えば「自治」というような言葉が内実が不明確なまま使われてきた[3]。また住民の間に大まかな階層を想定することは理解できるにしても，ライースやアフダースがそれぞれ特定の階層の利害を代表して行動しているというところまで踏み込んだ議論をするには，現存する史料から得られる情報量はあまりにも少なく曖昧である。

一方，今までおこなわれてきた議論では，比較的情報の多いディマシュクの事例がまず検討され，ハラブに関する情報はその比較の対象として扱われがちである。しかしシリアを代表する二大都市であるとはいえ，300 km 以上も離れて位置する両都市は，政治史ひとつを取ってみてもずいぶん異なった環境の中に置かれてきた。したがって両者を比較検討する前に，ハラブの事例はできるだけハラブ独自の文脈の中で理解すべきであろう。

II　ライースの変質をめぐって

1　研究史

Ashtor は 11 世紀後半以降の事例に基づいて，ライースもムフタスィブ（*muḥtasib*）など他の職と同じく，為政者の任命による公職であるとした。Hoffmann も，ライースをヨーロッパの自治都市に見られるような「市長」と見なすことはできず，君主の権力に依存する存在であるとしている［Ashtor 1956 : 108 ; Hoffmann 1975 : 90］。

これに対して Cahen は 10 世紀～ 11 世紀半ばの事例をも考察し，そこにライースの変質を見出した。彼によれば，住民反乱などの指導者として立ち現れた最初期のライース達の地位は，為政者の公認を受けた確固たるものではなかった。しかしハラブではミルダース朝による征服時およびセルジュク朝の征服以降に，またディマシュクではセルジュク朝の征服以降に，それぞれのライースは君主から公式に任命される公職となったとする［Cahen 1958–59 : 23］。

Havemann は Cahen の議論を引き継いで，史料中に現れる「アフダースのライース（*ra'īs al-aḥdāṯ*）」と「市のライース（*ra'īs al-balad*）」の違いを強調し，前者は支配者の任命を受けずにその地位を得た「事実上の（*faktisch*）ライース」であり，後者は支配者に任

命された「公式の（*offiziell*）ライース」を示しているとした。そして事実上のライースたるアフダースのライースが市のライースに任命されることによって公的な性格を持つようになったと考えるのである。この変化はディマシュクではセルジュク朝期の489/1096年から見られるのに対して，ハラブでは変化は明瞭ではなく，ミルダース朝がハラブを征服する415/1025年に登場するサーリムからすでに公的な性質を帯びていたのであろうと考えた[Havemann 1975: 119, 123, 130]。

Cahen と Havemann の指摘するライースの変質は興味深いが，両者とも認めているように，ディマシュクの事例の検討から得られるライースの変化がそのままハラブに見られるわけではないのである。また君主から「ライースに任命された」と史料に記されているか否かや，彼らが「市のライース」と呼ばれたかどうかという点だけをもって直ちにライースの性格を二つに分類するのは，いささか表面的に過ぎるだろう。

以下では，ディマシュクの事例から導き出されたライースの変質を通してハラブの事例を解釈するのではなく，まずハラブのライース達の出自と動向に関する情報を整理し，それらの情報に基づいて検討を試みることにする。

2 11世紀初頭～12世紀初頭のライース達

以下にライース経験者の情報を就任順に整理して提示する。Havemann と大川原が既にライースの一覧表を作成し，彼らの動向を含めた政治史の流れをまとめている[Havemann 1975: 158, 163－166; 大川原 1984: 31－43]。両者の成果はこの時期の政治史を概観するには今なお有益であるが，TDM や BT からの情報によって補足や修正を施すべき点もある。ただしここでは，両者の記述との相違点をすべて記すことはしなかった。

① Abū al-Murajjā Sālim b. Mustafād[4]

- 出自：11世紀初頭にハラブを支配したマンスール政権下で活躍した有力軍人で[5]，市街部にハンマーム付きの館を構えていた。父ムスタファードは，ハムダーン朝（ハラブ支配：333－394/944－1004年）のサイフッダウラ（Sayf dw.)(在位：333－356/944－967年）に仕えたグラームであった[BT 9: 4161－4163]。
- 事績：415. 9. 17/1024. 11. 22にミルダース朝のサーリフ（Ṣāliḥ b. Mirdās）がハラブに到着し，先遣隊と共に同市を包囲した。50日余り戦いが続いた後，サーリムは武装した住民とかつてハムダーン朝に仕えていたグラーム達を率いてサーリフの許へ出ていった。市街部の住民の安全保証を取り付けた後，サーリムはサーリフをハラブに迎え入れた。次いで両者は，内城に拠るファーティマ朝の残存勢力を包囲する。その際に「サーリフはサーリムをハラブに任命し（*wallā*），そこにおけるライースの地位（*ri'āsa*）とアフダースに対する指揮権を彼に与えた」[6]。415. 4/1025. 6にサーリフがパレスチナへと去った後，サーリムはミルダース朝のワズィールであるスライマーン

(Sulaymān b. Ṭawq) とともに城塞のファーティマ朝勢力を攻撃し続けた。ファーティマ朝の城塞総督マウスーフ (Mawṣūf) が降伏する際の交渉では，ワズィールのスライマーンとともにサーリムが条約の履行を誓約した [Ant : 247 ; BT 9 : 4162]。423/1031, 32年，ミルダース朝のナスル1世に対する反乱を企て，アフダースを率いて城塞を攻撃しようとする。しかしナスルが反撃に出るとハラブ人達 (al-Ḥalabīyūn) はナスルに味方した。サーリムは捕らえられ，処刑された [BT 9 : 4162 – 4163 ; ZH 1 : 249]。

② Abū 'A. al-Ḥasan b. Hl. al-Ḥusaynī al-Hāšimī al-Ḥutaytī al-Ḥalabī al-Šarīf

- 出自：出自を明確に示す情報は見当たらない。名前に付けられた肩書きとニスバから，ハラブ出身のシャリーフであると考えられる。
- 事績：何時誰に任命されたかは不明。472 – 473/ 1080年にウカイル家のシャラフッディーン＝ムスリム (Šaraf dn. Muslim b. Qurayš al-'Uqaylī) がハラブを包囲した際に，彼のために市門を開いて迎え入れる。この時既に「ハラブにおけるライースかつアフダースの指揮官 (*naqīb*)」と呼ばれている [KT 10 : 115 ; ZH 2 : 68]。478/ 1085年，シャラフッディーンが戦死するとハラブ市街部の行政 (*tadbīr*) を独占し，城塞に拠るウカイル朝のサーリム (Sālim b. Mālik) と協力して，セルジュク朝の諸勢力 (Malik Šāh, Sulaymān b. Qutalmiš, Tutuš) の対立を利用しつつ自立を図る[7]。一方ハラブ住民はフタイティーを嫌うようになったので，彼は市街地の南に城塞を築き，城壁と濠で囲んでそこを居城とする。この城はシャリーフ城 (Qal'at al-Šarīf) と呼ばれた [ZH 2 : 92, 95 – 96]。479/ 1086年，スライマーンに対抗するために招いていたトゥトゥシュがスライマーンを破ると，フタイティーは約束を反故にしてハラブ明け渡しを拒否する。しかし住民と一部のアフダースの裏切りでトゥトゥシュがハラブに入る。フタイティーはシャリーフ城に留まるが，マリクシャーフの到来を前に亡命する。彼は後に帰還を求めるが，住民の反対で認められなかった [KT 10 : 148 ; ZH 2 : 99, 102]。

③ Barakāt b. Fāris al-Fū'ī al-Mujann

- 出自：Dayr al-Fū'a[8] 出身の盗賊 [ZH 2 : 138]。
- 事績：セルジュク朝の総督アクスンクル (Aq Sunqur) が改悛させたうえで任命 [ZH 2 : 139]。479 – 487/ 1086 – 1094年の間に就任した[9]。彼はワズィール達やカーディー達を支配したと言われるほどの勢力を誇り [*ibid.*]，ハラブ市街部に礼拝所 (*masjid*) を建設した [AH : 64]。490/ 1097年セルジュク朝の君主リドワーン (Faḫr al-mulūk Riḍwān) に対して反乱を企てるが，新ライース (④) が任命されるとアフダースが離反し，フーイーは捕らえられ処刑される [ZH 2 : 140 – 141]。

④ Abū al-Barakāt Ṣā'id b. Badī'

- 出自：ハラブのワズィールを輩出したバディー (Badī') 家の一員。彼の兄弟が2名アクスンクル総督時代からリドワーンの治世まで相次いでワズィールを務めた[10]。同家の歴史については二つの異なる伝承がある。(1) ハムダーン朝の Sayf dw. 時代 (944 – 967

年）のダイラム人の子孫で，父はハラブで生まれた［ZH 2:141］。(2)バディーはアジャムから到来し，アクスンクルに仕えて金銭や不動産を獲得し，リドワーンの許でライース職に就いた［TDM 1:71 a］。

- 事績：ライース就任に関する情報が混乱している。(1)490/1097年にフーイーの反乱に際してリドワーンが任命した［ZH 2:139］。(2)まず父バディーがリドワーンの許でライース職に就き，それをサーイドが継いだ［TDM 1:71 a］。

507/1113年，リドワーンの死後，イスマーイール派弾圧をセルジュク朝の君主アルプアルスラン（Alb Arslān）に進言し実行する［TDM 1:71 a–b］。507.10/1114.3にアルプアルスランの後見人としてディマシュクから来たアタベクのトゥグテギン（Ṭuġtakīn）に追放される［ZH 2:170］。この後，後任のフラーティー（⑤）の離任が言及されないまま，追放されたはずのサーイドがハラブで活動している情報が見られる。508.4/1114.9, 10，アルプアルスランを暗殺し実権を握ったルウルウ（Lu'lu'）[11]に臣従を誓う［TDM 1:82 a］。自分の息子達の割礼に際して，着飾らせたり武具を身につけさせた住民と共に市街を行進した。それを見たルウルウは，ライースの勢力の大きさに驚き，大事に至らぬうちに彼を陥れようとする。しかし511/1117年，サーイドはルウルウの攻撃を退け，逆に亡命に追い込む［TDM 1:100 b–101 a］。イブン・アルミルヒー[12]支配期（511–512/1117–1118年）に追放される［TDM 1:138 a］。513/1119, 20年にジャーバル城（Qal'at Ja'bar）[13]でイスマーイール派に暗殺される［TDM 1:138 a］。

⑤ Ibrāhīm al-Furātī

- 出自：不明。
- 事績：507/1114年にトゥグテギンがサーイドの後任として任命する［ZH 2:170–171］。具体的な行動を示す情報はないが，ハラブ市街のイラーク門近くにあったIbn al-Furātī広場の名は彼に由来するという［ZH 2:171］。離任時期は不明であるが，遅くとも508.4/1114.9, 10にはサーイド（④）にとって代わられていたようである[14]。

⑥ Ibn al-Ṣūfī

- 出自：この人物はディマシュクのライースも務めたとあり［TDM 1:153 a］，同地のライースを輩出したスーフィー家（Banū al-Ṣūfī）の一員と思われる。しかしディマシュクのライースのうちどの人物に当たるかは不明である[15]。
- 事績：アルトゥク家（Banū Artuq）[16]のイルガーズィー（Najm dn. Īlġāzī）によってハラブのライースに任じられた［*ibid.*］。512/1118年以降に就任[17]。ハラブでの活動に関する情報は無い。514/1120, 21年にハラブで没した［*ibid.*］。なおこの人物は，既存の研究では言及されていない。

⑦ Makkī b. Qurnāṣ al-Ḥamawī

- 出自：ハマー（Ḥamā）のクルナース家（Bayt Qurnāṣ）[18]の出身［KT 10:552］。

- 事績：514/1120年にイルガーズィーが任命［ZH 2:198－199］。515/1121年にイルガーズィーの命令でナーイブのスライマーン（Sulaymān b. Īlġāzī）とともにシャリーフ城を取り壊し，かつてリドワーンに仕えていた兵士達をそこから追い出した［ZH 2:199］。515/1121年，イルガーズィーの息子でかつナーイブであったスライマーンの反乱に加担し，反乱鎮圧後処刑される［KT 10:592; TDM 1:161 b; ZH 2:200, 202］。

⑧ Sulaymān b. ʻAbd al-razzāq al-ʻAjlānī al-Bālisī

- 出自：不明。
- 事績：515/1121年にハマウィーの後任としてイルガーズィーが任命［ZH 2:203］[19]。動向に関する具体的な記述は見当たらない。離任時期の情報が混乱している。(1) 517/1123年以前に失脚[20]。(2) 518/1124年にアルトゥク家のバラク（Nūr dw. Balak）が解任した［Azi:374; TDM 1:195 b］。ライースへの就任と罷免を2回ないしは3回繰り返したのかも知れない。

⑨ 〔Abū al-〕Faḍā'il b. Ṣāʻid b. Badīʻ[21]

- 出自：バディー家。④の息子。
- 事績：最初の在職に関しては情報が混乱している[22]。517/1123年にハラブをバラクに委ねることに反対する一派の中に「ハラブのライース」として名前が見える［TDM 1:189 b］。その後518/1124年にアルトゥク家のティムルタシュ（Ḥusām dn. Timurtāš）が任命した［Azi:374; TDM 1:198 a; ZH 2:220］。521/1127年，ブルスク家のマスウード（ʻIzz dn. Masʻūd al-Bursuqī）の没後，ワーリーのトゥマン（Tūmān）に忠誠を誓い，ハラブの有力者にも宣誓させる。その後トゥマンと不仲になり，セルジュク朝スルターンのマフムード2世（Maḥmūd b. M.）から遣わされたフトルグアバフ（Ḫutluġ Abah）をハラブに入れる。しかし彼とも対立し，アルトゥク家のスライマーン（Badr dw. Sul.）やアフダースと協力し，フトルグアバフを攻撃する。この攻撃の最中にアンティオキア公ボヘモンド2世がハラブに迫り，イブン・サーイドはスライマーンやセルジュク家のイブラーヒーム（Ibr. b. Riḍwān）と共にボヘモンド2世と交渉し，貢納と引き換えに休戦協定を結ぶ［TDM 1:223 a, 226 a–b; ZH 2:237－238］。522/1128年，ハラブを手に入れたイマードッディーン＝ザンギー（ʻImād dn. Zankī）を恐れジャーバル城へ亡命する［KT 10:650; TDM 2: 2 a–b; ZH 2:243］。

⑩ Muḥammad b. Saʻdān al-Ḥarrānī

- 出自：ハッラーン[23]出身［TDM 1:195 b, 198 a; ZH 2:217］。
- 事績：ライース就任については，二つの異なる情報がある。(1) 517/1123年にバラクが⑨の後任として任命した［TDM 1: 195 b］。(2) 518/1124年にバラクが任命［Azi:374; TDM 1:195 b; ZH 2:217］。その他の動向については具体的な記述は見当たらない。518/1124年，バラクの死後ハラブに入ったティムルタシュに逮捕される［TDM

1:198 a; ZH 2:219－220]。

以上の10名が，ザンギー朝が進出する以前のハラブのライース達である[24]。

3 有力ライースと弱小ライース

前節および付表を一瞥してわかるように，①から④までと⑨の5名のライースは在任期間が長期にわたっているのに対し，それ以外のライースは在任期間が1年内外と短期間である。また在任期間の長いライースは，複数の支配者の統治期にまたがって在任している点でも他のライースとは対照的である。在任期間の長いライース達の事績を見ると，全てかなりの影響力を誇ったライースであることがわかるので，彼らを有力ライースと呼ぶことにする。

これら5名の有力ライースの事績を比較すると，③を除く4名のライースには共通点が見いだされる。それは外交交渉への参与である。サーリム（①）はミルダース朝のサーリフと交渉してハラブ住民の安全を保証させ，またファーティマ朝との交渉に際してもミルダース朝のワズィールと並んで条約の履行を保証している。フタイティー（②）は，ハラブの支配者であったシャラフッディーンが戦死すると，セルジュク朝の諸勢力の均衡の上にハラブの独立を維持するため，外交的な駆け引きを繰り返した。ルーム＝セルジュク朝の祖スライマーンがハラブを狙うと，フタイティーはセルジュク朝のスルターン＝マリクシャーフに救援を求め，それがかなわないとなるとディマシュクにいたシリア＝セルジュク家のトゥトゥシュに使者を送ってハラブの明け渡しを申し出ているのである［ZH 2:95－96]。サーイド（④）はルウルウが亡命すると，後者がかつて追放したシリア＝セルジュク家のスルターンシャーフ（Sulṭān Šāh M.）に使者を送ってハラブの君主として呼び戻している［TDM 1:101 a]。また彼の息子の〔アブー・アル〕ファダーイル（⑨）が十字軍勢力と休戦協定を結ぶ交渉にあたったことは，先に提示したとおりである。このように都市全体の運命を決する外交交渉にたずさわったという事実は，彼らがハラブを代表し得る力を保持していたことを示していよう。

フーイー（③）はワズィールやカーディーに対してさえ影響力を及ぼしたことが伝えられる一方で，外交交渉の場面には現れない。マリクシャーフの没後に生じたセルジュク朝の後継者争いの過程で，シリア＝セルジュク家の祖となるトゥトゥシュは497. 5. 9 / 1094. 5. 27にハラブ総督アクスンクルを破って死に至らしめ，二日後ハラブを手に入れた。この間，アクスンクル軍の敗残兵がアフダースを含むハラブの住民と合流し，スルターン＝バルキヤールク（Barkiyāruq）に援助を求めてトゥトゥシュの支配を拒否する動きが起こる。しかし意見の一致を見ないまま時間が経過するうちに一部のアフダースが市門を開いてしまい，トゥトゥシュ軍がハラブ入城を果たした。以上の経緯を伝える史料は，当時ライースであったはずのフーイーの行動をまったく伝えていない［dTD:126－127; ZH 2:117]。

表　ハラブの支配者とライース　1025－1260年

支配者	ライース	典拠
1025 Asad dw. Ṣāliḥ (Mirdasid) 1029 Šibl dw. Naṣr	1025–32 Sālim b. Mustafād	BT 9 : 4161 – 63 Ant : 246 – 47
1038 Banjūtakīn al-Dizbirī (Fatimid)	? ? ? ?	
1042 Mu'izz dw. Ṯimāl (1) (Mirdasid)	? ?	
1058 Ibn Mulhim (Fatimid)	?	
1060 'Izz dw. Maḥmūd (1) (Mirdasid) 1061 Mu'izz dw. Ṯimāl (2) 1062 Asad dw. 'Aṭīya 1065 'Izz dw. Maḥmūd (2) 1075 Jalāl dw. Naṣr 1076 Sābiq	? ? ? ? ?	
1080 Šaraf dw. Muslim (Uqaylid)	?–1086 al-Ḥ. b. Hl. al-Ḥutaytī al-Hāšimī al-Ḥalabī (šarīf)	KT 10 : 115, 148 ZH 2 : 68, 99, 102
1086 Tāj dw. Tutuš (1) (Seljukid) 1086 Qasīm dw. Aq Sunqur 1094 Tāj dw. Tutuš (2)	?–1097 Barakāt b. Fāris al-Fū'ī al-Mujann	ZH 2 : 138 – 41
1095 Faḫr al-mulūk Riḍwān	1097–1114 Ṣā'id b. Badī' (BB) (1)	ZH 2 : 139, 170
1113 Tāj al-mulūk Alb Arslān	1114–? Ibr. al-Furātī	ZH 2 : 170 – 71
1114 Sulṭān dw. M.	1114–17,18 Ṣā'id b. Badī' (BB) (2)	TDM 1 : 82 a, 138 a
1118 Najm dn. Īlġāzī (Artuqid)	?–1120 Ibn al-Ṣūfī	TDM 1 : 153 a
	1120–21 Makkī b. Qurnāṣ	KT 10 : 592 ; ZH 2 : 198 – 99
1122 Badr dw. Sul. 'Abd al-jabbār	1121–? Sul. b. 'Abd al-razzāq (BAj)	Azi : 374 ; TDM 1 : 195 b ZH 2 : 203, 217
	?–1123 〔Abū〕 al-Faḍā'il b. Ṣā'id (BB) (1)	TDM 1 : 189 b, 190 b
1123 Nūr dw. Balak	1123, 24–24 M. b. Sa'dān al-Ḥarrānī	Azi : 374 ; TDM 1 : 195 b 198 a ; ZH 2 : 217, 219 – 20
1124 Ḥusām dn. Timurtāš	1124–28 〔Abū〕 al-Faḍā'il b. Ṣā'id (BB) (2)	Azi : 374 ; KT 10 : 650 TDM 1 : 198 b, 2 : 2 a–b ZH 2 : 220, 234
1125 Aq Sunqur al-Bursuqī (Bursuqid) 1126 'Izz dn. Mas'ūd		
1128 'Imād dn. Zankī (I) (Zangid)	1128–? Ṣafīy dn. 'A. b. 'Abd al-razzāq (BAj) (1)	Azi : 381 ; TDM 2 : 2 b ZH 2 : 243
1146 Nūr dn. Maḥmūd	? 1158, 59–? Ṣafīy dn. 'A. (BAj) (2)	TDM 3 : 118 b
	?–1174 Abū M. al-Ḥakam	ZH 3 : 18
1174 al-Ṣāliḥ Ismā'īl 1181 'Izz dn. Mas'ūd 1182 'Imād dn. Zankī (II)	1174–? Ṣafīy dn. Ṭāriq b. 'A. al-Bālisī (BTu)	ZH 3 : 18
1183 Ṣalāḥ dn. Yu. (Ayyubid)	(1183) Ṣalāḥ dn. retained him in the *ri'āsa*.	ZH 3 : 71
1193 al-Ẓāhir Ġāzī	? ? ?–1216 Waliy dn. Abū al-Qāsim b. 'A. (BTu)	AH : 50
1216 al-'Azīz M.	1216–? Jamāl dn. 'A. (BTu)	MK 3 : 238
1237 al-Nāṣir Yu.	? ?	
〈1260 Mongol Occupation〉	?–1260 Ṣafīy dn. b. Ṭarza	MAB 3 : 202

注・年代は西暦のみを示した。支配者に関しては，統治の開始年のみを示した。
・2度在任した人名の後ろには (1)(2) と記し，それぞれ1回目と2回目の在任であることを表示した。
・人名の後ろに付したローマ数字は，1世／2世の区別を示す。
・支配者の欄に王朝名を示した。ライースについては，複数の人物を出した家系名を下の略号を用いて表した。
BAj＝Banū al-'Ajlānī, BB＝Banū Badī', BTu＝Banū al-Ṭurayra.
・上記以外の人名および典拠表示の略号は，本文と同じである。

フーイーと他の有力ライースが見せた行動の違いはどのような理由によるものであろうか。このことを考える上で重要に思われるのは，フーイー以外の者がハラブ出身者であるかまたはライース就任以前にハラブにおいて既に勢力を有していた人物と目される点である。サーリム（①）は，その父とともに地元の有力軍人であり，また手勢を率いてミルダース朝と交渉していることからわかるように，ライースに任命される以前からかなりの勢力を保持していた。また②のフタイティーは，名前のal-Ḥalabīというニスバから，ハラブ出身であると考えられる。また彼はシャリーフと呼ばれていることから預言者ムハンマドの血筋を引く者としてムスリムに対する宗教的な権威も有していたと考えられよう。

④と⑨が属するバディー家がハラブに到来した経緯については2説あり，どちらが正しいかは判断しかねる[25]。しかしいずれにせよ④のサーイドがライースになった時点では，すでに同家はハラブのセルジュク朝に仕えたワズィールを2名輩出しており，ハラブにおける有力家系の一つになっていたと考えられる。このようにバディー家の勢力拡大は，同家がセルジュク朝に仕えたことを抜きにしては語れないが，同朝の勢力が衰えた後もバディー家のライースはハラブにおける影響力を維持している。同家は政治権力者に仕えながら比較的短期間でハラブに独自の勢力を築くことに成功した例と言えるであろう。

これらのライース達に対して，フーイーはハラブ周辺の村落出身の盗賊であり，時の総督アクスンクルが改悛させたうえで任命したライースである。アクスンクルはフーイーがならず者（*mufsid*）達に通じている点を見込んで抜擢したとあるから［ZH 2:139］，彼らの間にはそれなりの勢力を有していたのであろう。しかしその経歴や出身地を考えると，ライース就任前にハラブ住民の間に大きな支持基盤を有していたとは思えない。

もともとハラブに勢力を有していた有力ライース達とフーイーとでは，ライースへの「任命」が意味するものはかなり違ったはずである。すなわち前者の場合は，そのライースへの任命は彼らの権威や影響力を支配者が追認する意味合いが強いのに対し，フーイーの場合はまさに支配者が彼にライースという地位と権力を授けたと言えるからである。フーイーがアクスンクルの下で内政に関して大きな影響力を行使していたにもかかわらず，支配者不在の状況下における外交交渉では指導的な役割を果たしたことが知られていない理由として，フーイーの勢力を支えたものがまず第一に支配者の後ろ盾であったということが考えられよう。

在任期間の短いライース（⑤⑥⑦⑧⑩）については情報が乏しく，彼らの具体的な動向はほとんどわからない。また彼らの在任期間は単に短いだけでなく，複数の支配者の統治期間にまたがることがほとんどない[26]。これらのライース達を，上で考察した有力ライースに対して「弱小ライース」と呼ぶことにしよう。

彼らの在任期間が上記のような特徴を見せるのは，その任免が支配者の意向や政治動向の影響を受けやすかったからであると考えられる。このことは，これらのライース達がその権力の後ろ盾となる支配者の力に大きく依存していたことを示しており，彼らが都市内に自前

の強固な勢力基盤を築いていなかったことを予想させる。実際，弱小ライースの5名のうち⑥⑦⑩の3名は明らかにハラブ以外の出身であり，その他の2名についてもライース就任以前にハラブの有力者であったことを示す情報は皆無である。

先学達もライースの出身地に注目していないわけではない。支配者が異邦人をライースに任命した理由として，Ashtor は有能な人物を登用するためとし［Ashtor 1956 : 105］，大川原は「市民を押さえ自己の勢力を伸ばすために有能な人物を他市に求めた」とする［大川原 1984 : 32］。Cahen は，君主が自分の支配地以外の出身者をライースに就けようとしたと述べるものの，その意図については明確に述べない［Cahen 1958–59 : 24］。Havemann と Hoffmann はライースの社会的地位や出身階層を重視する一方で，その出身地にはあまり関心を寄せていない［Havemann 1975 : 118 – 124 ; Hoffmann 1975 : 90］。

ライースを基本的には公職と考える Ashtor と Hoffmann はともかく，ライースを住民自治の象徴とする Cahen と Havemann がライースと住民とのつながりに大きく関わるこの点を明確に説明していないのは不可解でさえある。為政者がハラブ以外の出身者を抜擢して任命したライースは，新たに住民の間に支持基盤を築かない限り，住民の「自治」を体現するような存在にはなり得ないだろう。したがって短期間しかその地位になかった弱小ライース達は，住民の代表などではなく，支配者の意に沿って動く存在であったと考える方が適切ではなかろうか。

Cahen と Havemann によって，史料に登場した当初から「公式のライース」であったとされたハラブのライース達であるが，その出自や事績を検討すると彼らを単純に一括りにはできないことは明らかである。まず彼らは大きく有力ライースと弱小ライースに分けることができる。そしてさらに有力ライースはもともと地元に勢力を築いていた人物がほとんどであるのに対し，弱小ライースはハラブに勢力基盤を保持していない人物が支配者によって抜擢されていたと考えられることが判った。それでは次に，本節で得られた結果を念頭に置きながら，これらのライース達を同時代のハラブをめぐる政治史の中に置いて，その歴史的な位置づけを試みてみよう。

Ⅲ　ハラブの政治史とライース

1　政治史の中のライース達

前節で指摘した点に注意して付表を見ると，地元に勢力を持っていた人物がライースに任命される場合とそうではない場合が入れ替わり現れることがわかる。これを支配者側の政策の面から表現すると，(1) 地元の有力者をライースに任命しその権威を追認して支配の安定を図るか，(2) 地元の有力者を排除し，自分の意にかなう人物をライースに就けることによってより直接的な支配を目指す，という二つの政策が繰り返されたということになろう。

ハラブ最初のライースであるサーリム（①）と半世紀の後に現れたフタイティー（②）は

ともに支配王朝の交替に重要な働きを見せている。いずれの場合も，新たにハラブを手に入れた支配者は，政権交替期の混乱の中で頭角を現したこれらの人物の協力を得ることによって，ハラブ入城を果たしている。このように最初期のハラブのライースと支配者の関係は，住民に影響力を持つ人物を，支配者がその権威を追認しつつ取り込みを図るというものであった。

サーリムとフタイティーの間に見られる半世紀の空白期間についてはよくわからないが，アフダースの活動は継続して見られるので［Cahen 1958-59：16－17；Havemann 1975：93－96；谷口 1990：90－95］，複数の有力者が併存した時代と思われる。452－453/1060－1061年にミルダース朝のマフムード（'Izz dw. Maḥmūd）とシマール（Mu'izz dw. Ṯimāl）の間で繰り広げられた抗争に際して，それぞれに味方した計7名のアフダースの名前が伝わっている［ZH 1：282－283］。また454/1062年にはアフダースの指導者と思われる4名が，アンターキーヤ（アンティオキア）[27]へ赴いてビザンツ帝国の総督と領土の割譲などについて交渉したことを疑われ，シマールによって処刑されている［ZH 1：287］。アフダースの個人名が史料に残されるのは極めて稀である。彼らはおそらくアフダースの中で指導的な立場にあった人物であろう。ディマシュクでも387－388/997－998年に複数のライース達（*ru'asā'*）が割拠していたことが指摘されている［Cahen 1958-59：12；Havemann 1975：82－83］。11世紀半ばのハラブもそれと似た状況であったのだろう。

さて，先に挙げたライース任命に当たっての方針を比較すると，支配者はできるだけ(2)の方を目指すであろうということは容易に想像がつく。しかしこの政策を採る場合，地元の有力者の勢力を抑えることができなければ，支配者が任命したライースの力は限られたものになってしまい，ついにはその有力者が実力でライースの地位を奪ってしまう危険性がある。つまり，この政策が成功するためには，ライースの権力を支える政権が強固で安定していることが必要なのである。

このように考えると，ハラブに強固な勢力基盤を築いていなかったと見られる点では弱小ライース達と同じ条件であるのにもかかわらず，フーイーが有力ライースとして大きな影響力を持つようになった理由が説明できる。フーイーがライースを務めた時期は，先に述べたようにセルジュク朝内で支配者の交替があったものの，ハラブに拠る政権が比較的安定していた時期なのである。特にフーイーの任命者であり，また彼がその下で大きな力を揮った総督アクスンクルの統治期（479－487/1086－1094年）は，犯罪が減少してハラブが繁栄を享受した時期であると記憶されている［ZH 2：103－104］。

一方，弱小ライース達が在任した時期を見ると，全て507/1114年以降であることがわかる。この時期は，セルジュク朝のリドワーンが没してからザンギー朝がハラブを支配するまでの政治混乱期に当たり，付表を見れば明らかなごとく次々と支配者が交替していった時代なのである[28]。この時期の支配者達は，バディー家のライースを罷免しては地元の有力者を避ける形でライースを任命したが，その後ろ盾となるべき政権自体が安定を欠いていたため，

そのライースは大きな力を持つことができなかった。そして結局のところ，バディー家の出身者が再びライースの地位に就くことになる。このような経過が何度か繰り返されたのである。まさに上で指摘した二つの政策の間を揺れ動いた時代と言うことができる。

この時期にバディー家出身者とそれ以外のライースが頻繁に交替し，また任免に関する情報が混乱している背景には以上のような事情があると考えられる。その典型的な例は⑤のフラーティーの場合である。II. 2の④で示したように，ディマシュクから507. 10/ 1114. 3にハラブへ到来したトゥグテギンは，10年以上にわたってライースの地位にあったサーイド（④）を追放し，フラーティーをライースに任命した。しかしトゥグテギンは，住民の多数を占めるシーア派をあからさまに非難したために住民の反発を買い，早々にハラブを立ち去ってしまった［TDM 1:72 b］。この後ライースが交替したという記事が見られないまま約半年後には，ライース＝サーイドが新しく実権を握ったルウルウに臣従を誓っている。任命者のトゥグテギンがハラブを去って間もなく，後ろ盾を失ったフラーティーからサーイドがライースの地位を奪い返していたと見て間違いないであろう[29]。

しかしこのバディー家にしてもしばしばライースの地位を追われ，リドワーンの治世のように長期にわたってライースを出すことはなくなった。支配者が統制を強めたことによって政治動向に左右されやすくなったライースの地位は，ザンギー朝到来前夜の15年間（507－522/ 1113－1128）に政治混乱の影響を受けて不安定なものとなっていったのである。

2　ザンギー朝到来前夜の状況

シリア＝セルジュク朝末期からザンギー朝到来までの15年間は，頻繁に交替を繰り返すようになったライース達に替わって，ウラマーの名家が住民の指導者として活躍するようになった時期である。特に影響力を増したのがシーア派（12イマーム派）の名家であるハッシャーブ家[30]であった。同家のファフルッディーン＝ムハンマド（Faḫr dn. M. Ibn al-Ḫaššāb)(519/ 1125, 26年没）は，507/ 1113年にセルジュク朝のリドワーンが没した後に実施されたイスマーイール派の弾圧についてライース＝サーイドと話し合い，またその断行をセルジュク朝政権に求めている。また511/ 1118年にアルトゥク家のイルガーズィーがハラブへ招かれた際にもファフルッディーンは中心的な役割を果たし，十字軍勢力との戦いに際しても先頭に立って行動している。彼はイルガーズィーをハラブへ招いた際に「都市の防衛と福利の監視の責任者（*al-marjū' ilay-hi fī ḥifẓ al-madīna wa al-naẓar fī maṣāliḥ-hā*)」と呼ばれており，また518/ 1124年にはハラブの運営（*tadbīr*）を任されていたとされている［谷口 1996:83－85］。

これらの行動を見ると，ファフルッディーンは当時の弱小ライース達よりも影響力を持っていたことは明らかである。実際，彼は518/ 1124年には「ライースの地位にあった」と記されているのである。さらにファフルッディーンが暗殺された後には息子のヤフヤー（Yaḥyā Ibn al-Ḫaššāb)(541/ 1146, 47年以降没）がライースの地位に就いたとされている。

いずれの場合も支配者に任命されたことを示す記事は無く，また支配者が任命したライースが同時に存在する。これらのことから両者の地位は支配者から公式に与えられたのではなく，まさに「事実上のライース」と言うべきものだったと考えられる［谷口 1996：85, 88 注9］。

このハッシャーブ家のように派手な活動を見せたわけではないが，スンナ派のアブー・ジャラーダ家[31]は，ハラブのカーディーを代々輩出してきた名家であった。この時期にカーディーを務めていた同家のムハンマド（Muḥammad Ibn Abī Jarāda)(446－534/1054－1139年）は，ボードワン2世らにハラブが包囲された518/1124年に使節団の一人としてMawṣil（マウスィル，モスル）へ赴き，ブルスク家のアクスンクル（Aq Sunqur al-Burusqī）の来援を得ることに成功して故郷を窮地から救っている［谷口 1996：68－69］。

シリア＝セルジュク朝末期以降ライースの地位が不安定となり影響力が小さくなると，その間隙を埋めるようにしてウラマーの名家であるハッシャーブ家が勢力を伸ばし，当時影響力を持つライースを輩出していたバディー家と肩を並べる存在となった。両家の関係を伝える情報は案外少ないが，両家が武力衝突に発展するほど激しく対立したり，どちらかが他方を屈服させたというような記録は見当たらない。おそらく協調と対立を繰り返しながらもハラブの有力家系として共存していたのであろう[32]。

ここで最後に強調しておきたい点は，この時期にハラブの住民に大きな影響力を及ぼし得たこれらの家系は，いずれも支配者の後ろ盾に依存することなく勢力を維持してきた土着の勢力であるということである[33]。ライースの動向だけに注目していると，弱小ライースが支配者によって任免を繰り返されたこの時期において，住民の動きは権力によって圧殺されていったように見える。しかし，求心力の中心はライースからウラマーへと移っていったが，土着勢力はなお政治的な影響力を保っていたのである。ザンギー朝到来前夜の15年間は，しばしばハラブ以外の出身者が任命されるようになったライース達が力を失い，替わって土着のウラマーが住民の先頭に立って政治的に重要な役割を果たすようになっていった時期なのである。

Ⅳ おわりに

11世紀前半に姿を現したハラブのライースに対して，支配者達はまずその権威を追認することによって体制内へ取り込もうとした。その後11世紀末からは，地元に勢力基盤を持たない人物をライースの地位に就けることによって統制の強化が図られた。この試みはセルジュク朝政権が安定している間は成功を収め，支配者の下でライースは大きな影響力を行使した。しかし，507/1113年のリドワーン没後に始まる政治混乱期に支配者が目まぐるしく交替するようになると，政治動向の影響を受けてライースの地位は不安定なものとなっていった。

以上のような支配者の取り組みを，ライースを支配体制に組み込むための公職化あるは制

度化への努力と考えることには私も異論はない。しかし支配者の意図とその結果は区別して考えねばならない。Cahen と Havemann は，公職化によってライースに対する統制が強まった一方で，支配者の公認を得ることによってライースの権力基盤が固まったと評価している［Cahen 1958–59 : 23 ; Havemann 1975 : 146］。この評価は，セルジュク朝からブーリー朝へと比較的安定した政権が続いたディマシュクにおいて，11 世紀末から 12 世紀半ばまでスーフィー家がライースの地位を独占していたという事例から導き出されたものであり［Cahen 1958–59 : 13 – 15 ; Havemann 1975 : 86 – 91］，政治状況が安定を欠いていた時期のハラブには当てはまらない。政治混乱期を迎えた 12 世紀初頭のハラブでは，支配者による統制の強化はライースが政治変動の波を直接被るという事態を招き，ライースの地位をかえって不安定なものとする結果に終わったのである。

この後ハラブを支配したザンギー朝とアイユーブ朝の支配下では，ライースとアフダースの力は抑えられ，その任務は次第にシフナ（*šiḥna*）やムフタスィブといったより直接的に政権が掌握する職がおこなうようになっていったというのが大方の研究者の見解である［Ashtor 1958 : 181 – 185, 189 – 191 ; Cahen 1958–59 : 19 ; Havemann 1975 : 150 – 153 ; Hoffmann 1975 : 110 – 111］。確かに，ザンギー朝支配の開始後はハラブにおけるライースやアフダースの活動を伝える情報は非常に少なくなる。しかしハラブにおいては，散発的ではあるが少なくともアイユーブ朝時代の終わりに至るまではライースやアフダースの活動が見え，しかも 12 世紀初頭までと同じ様な任務を果たしていることが知られている［Ashtor 1958 : 189 – 191］。したがってライースがシフナなどにとってかわられたといっても，その過程は緩やかなものであったと思われる。

その一方でライースやアフダースが都市の命運を握る外交交渉に参加したり，支配者の交替に影響を与えたという例はほとんど見られなくなる[34]。つまりザンギー朝とアイユーブ朝は，前代から受け継いだ地元の政治慣行を強引に廃するのではなく，それらをむしろ制度として確立し行政機構の中に組み込んでいったと考えられよう。11 世紀末以来支配者達が試みてきたライースの統制が，安定した政権の下でようやく成功したのである。公職化という言葉を使うならば，ハラブのライースの公職化はザンギー朝時代以降に完成したと言うことができる。

522/ 1128 年にハラブを手に入れたイマードッディーン＝ザンギーは，バディー家のライース＝イブン・サーイドを亡命に追い込んだ［本稿：II. 2. ⑨］。この後ザンギー朝支配下のハラブで生じた住民反乱の中では，もはやライースやアフダースが中心的な働きを見せることはなかった[35]。替わって指導的な役割を果たしたのは，ハッシャーブ家などのシーア派ウラマーの有力家系である。それとともに，これらの騒乱はシーア派対スンナ派という宗派間の争いとして展開するようになる。ハッシャーブ家の弾圧が強行され，宗派間の争いに一応の決着がつけられたのは，ザンギー朝支配も末期を迎えた 570/ 1174 年になってからのことである[36]。

ライースやアフダースといったいわば世俗の土着勢力の統制に成功したザンギー朝政権にとっても，政治的な影響力を持つようになった土着ウラマーへの対応や宗派対立への取り組みは，宗教という微妙な問題を含むだけに扱いに慎重を要する難問であったと思われる。ザンギー朝の内政の特徴としてよく言及されるマドラサなどの宗教施設の創設やスンナ派優遇策も，このような点を考慮に入れて見直してみる必要があろう[37]。

注

- 年月日に言及する場合はヒジュラ暦／西暦という形で示し，月名はいずれも算用数字で示す。またヒジュラ暦に対応する西暦の年や月が2ヶ年あるいは2ヶ月にまたがる場合は，「,」を用いて459/1001, 02年というように表記する。
- 括弧の用法は，原則として（ ）は直前の語の説明などに，〔 〕は語句の補いに，［ ］は引用箇所の提示にそれぞれ用いる。
- アラビア文字表記の人名をローマ字転写する際には，以下の略号を適宜用いる。
  A.＝Aḥmad, ʻA.＝ʻAlī, ʻAl.＝ʻAbd allāh, ʻAr.＝ʻAbd al-raḥmān, b.＝ibn, dn.＝al-dīn, dw.＝al-dawla, Ḥ.＝Ḥasan, Hl.＝Hibat allāh, Ibr.＝Ibrāhīm, Ism.＝Ismāʻīl. M.＝Muḥammad, Sul.＝Sulaymān, ʻU.＝ʻUmar. Ya.＝Yaḥyā, Yu.＝Yūsuf.

1） ハラブのライースやアフダースに関する日本人の研究としては以下のようなものが挙げられる。大川原 1984は11世紀末から12世紀初頭にかけてのライースに関する情報を整理して提示し，Ashtorの研究に拠りつつ分析を加えている。また大川原論文が扱っている時代の前にあたるミルダース朝時代に関しては，ハラブのアフダースがミルダース朝軍とともに戦闘に参加していたことを示した太田 1986や，騒乱時におけるアフダースの動向などを分析した谷口 1990がある。ディマシュクについては，三浦 1994がライースとアフダースの活躍ぶりを簡潔に紹介している。なお，この時代のシリア諸都市の歴史研究に関する研究動向については，三浦 1991：107－109, 120－121；Miura 1994：112－115, 128－129を参照せよ。

2） Cahen 1958–59：22；Havemann 1975：130－131；Hoffmann 1975：89－91；大川原 1984：28－31。また三浦 1991：107－108；Miura 1994：112－115も参照せよ。

3） 私自身も当該時代のシリア諸都市について述べる際に，他に相応しい言葉が得られないことから「自治的」という表現を用いたり，ライースを「市長」と訳して都市民の代表者と説明したことがある［谷口 1990：87；谷口 1996：62］。もちろん中世ヨーロッパの自治都市や近現代における「自治」や「市長」が念頭にあったわけではないが，誤解を招く表現であったことは否めない。本稿では，「ライース」は翻訳せずにこのまま用い，また「自治的な活動」といった表現は，住民ないしはその指導的な立場の者が為政者の意向に関係なく政治的な行動をとる場合などを指して用いることとする。

4） この人物については既に詳しく紹介したことがあるので［谷口 1990：87－90］，その記述も参照されたい。

5）マンスール（Manṣūr b. Lu'lu'）は，ハムダーン朝から政権を簒奪したグラーム軍人の父ルウルウ（Lu'lu'）の後を継いで399または400－406/1008，09－1016年にハラブを支配した人物である［Salibi 1977：98－99］。

6）BT 9：4162. この記述は，同時代のシリアに生きた著名な詩人al-Ma'arrī（449/1057年没）の弟子Ibn al-Muhaḏḏab［Zakkar 1971：15, 259］の著作からの引用である［BT 9：4163］。同時代人であるal-Anṭākīは単に「ハラブに任命した」と述べるだけであるが［Ant：247］，BTの記述もほぼ同時代の史料に拠っていることから，Antに劣らず信用性が高いと判断した。なお，以前この箇所を引用した際に*ri'āsa*を「ライース職」と訳したが［谷口 1990：88］，この時点では職と言えるほど制度化されたものとは考えにくいので，本稿では「ライースの地位」と訳すことにする。

7）この時期の北シリアをめぐるセルジュク朝諸勢力の争いについては，井谷1994：35－38が詳しい。

8）ハラブから1日行程南方の村［ZH 2：139 n. 1］。

9）フーイーがライースに任命された正確な年は不明である。ここに挙げた年代の上限はアクスンクルがハラブの総督に就任した年で，下限はフーイーの活動が初めて史料上で言及される年である［ZH 2：102, 110］。

10）Abū al-Qāsim（アクスンクルとトゥトゥシュに仕える）とAbū al-Najm Hibat allāh（491/1098年までリドワーンに仕え，501－503/1107，08－1109，10年にはディマシュクの支配者トゥグテギンのワズィールを務めた）の二人［dTD：161, 163；TDM 1：35 a；ZH 2：112, 118, 129－130, 138］。

11）彼は*atābak 'askar*と呼ばれているが，この職については不詳。

12）Jalāl dw. Abū al-Ma'ālī al-Muḥsin b. al-Milḥī al-Dimašqī. リドワーンの軍監督官（*'āriḍ al-jayš*）を務めた。ルウルウ亡命後の混乱の中で511/1117年に実権を掌握したが，翌年には失脚した［TDM 1：106 b－107 a, 120 a–b, 122 b］。

13）ラッカ（al-Raqqa）の西方約50 kmにある，ユーフラテス川に面した城。現存。

14）④の事績の欄を参照。

15）スーフィー家については，Ashtor 1956：121－128；Cahen 1958–59：13－15；Havemann 1975：86－90；Havemann 1989：234－236を参照。

16）アルトゥク朝については，Hillenbrand 1990；Väth 1987を参照せよ。

17）年代は明記されていないので，イルガーズィーがハラブを獲得した年以降の就任とした。

18）BT 3：1204には，Ibn Qurnāṣ al-Ḥamawīと呼ばれる511/1117年生まれのAḥmadという人物が「ハマーにおけるライース家（*bayt al-ri'āsa*）」出身と記されている。ハラブのライースを務めたMakkīも同じ家系に属していたのかもしれない。

19）⑥の死後イルガーズィーがアジュラーニーをハラブのライースに任命したという記述があるので［TDM 1：153 a］，アジュラーニーは⑦の前に短期間ライースの地位にあったのかもしれない。

20）517/1123年にバラクがハラブに入る際にはイブン・サーイドがライースとして言及され，彼

がバラクによって解任されたという記事が見える［TDM 1:189 b, 195 b］。こちらの情報に拠れば，バラクに解任されたのはイブン・サーイド（⑨）でアジュラーニー（⑧）はそれ以前に失脚していたということになろう。なお ZH ではアジュラーニーがバラクによって解任されたとなっているが，これは写本ではライースの名前が空白になっていたところに校訂者が Azi を参照して補ったものである［ZH 2:217 n. 1］。

21) この人物の名前については史料間で異同がある。Azi, ZH は Faḍā'il とだけ記すのに対し，TDM は Abū al-Faḍā'il と記す。記事の内容から考えて，この二つの名前が同一人物を指していることは間違いない。

22) ⑧の事績の欄を参照。なお，Cahen もこの情報の混乱に気付いていたらしく，イブン・サーイドがすでにイルガーズィーの下でもライースであったのではないかと推測している［Cahen 1958–59:19］。

23) Ḥarrān. ハラブの東北東約 180 km，Urfa（ウルファ，エデッサ）の南東約 40 km に位置する。現在はトルコ領。

24) ④の出自の項目に挙げたように，④の父バディーもライースを務めた可能性がある。しかし異説のある不確定な情報なので，本稿ではこの人物をライースには含めなかった。また，以上のライース達と併存する形で，シーア派のウラマー家であるハッシャーブ家からライースの肩書きを持つ人物が二人出る。この二人については後述する。

25) サーイドの兄弟の一人 Abū al-Najm Hibat allāh が al-Iṣfahānī というニスバを伴って言及されているので［dTD:163］，本稿 II. 2 の④で示した (2) の伝承の方が蓋然性が高いと考えられる。

26) 複数の支配者の統治期にまたがって在任した可能性があるのは，スライマーン＝アジュラーニー（⑧）だけである。しかし彼の場合も，2 説ある失脚に関する情報のうち (1) では任命者イルガーズィーの治世のうちにイブン・サーイド（⑨）にとってかわられていたことになっている。

27) Anṭākīya. ハラブの西方約 90 km にある都市。現在はトルコ領内にあり，Antakya または Hatay と呼ばれる。

28) この時期の政治史については，大川原 1984:39－43 にその流れがまとめてある。

29) Cahen も同様の考えを示しているが，TDM を直接利用していない Havemann と大川原はこのサーイドの復権に言及していない［Cahen 1958–59:18; Havemann 1975:100; 大川原 1984:39］。

30) Banū al-Ḫaššāb. 同家は 10 世紀半ばにハラブへ移住してきた家系で，移住当初から法学者を輩出するウラマーの名家であった。同家の詳細については，谷口 1996:83－88 を参照せよ。

31) Banū Abī Jarāda. 同家は 9 世紀にハラブへ移住してきた家系で，10 世紀にはウラマーと言える人物を出した。11 世紀半ばから 12 世紀半ばにかけてハラブのカーディー職を代々継承した。同家については，谷口 1996:65－76 を参照せよ。

32) 両家が協力した例としては，上で述べた 507/1113 年のイスマーイール派弾圧がある。逆に両家が対立した例としては，517/1123 年にファフルッディーン＝イブン・アルハッシャーブが当時の支配者バドルッダウラ＝スライマーンを見限って，同じアルトゥク家のヌールッダウラ＝バラクを新たな支配者として迎え入れようとした事件が挙げられる。この時スンナ派のアジャミー

家（Banū al-'Ajamī）やアブー・ジャラーダ家などのウラマー名家と共に，バディー家のイブン・サーイドがバドルッダウラを支持した［TDM 1:189 b－190 a］。

33）上記のウラマーの2家系の土着性については，谷口 1996:89－90 を参照せよ。バディー家については，本稿 II. 3 を参照せよ。

34）581/1185，86年にアイユーブ朝のサラーフッディーン（Ṣalāḥ dn.）が病に倒れると，シリア領有を狙った従兄弟のナースィルッディーン（Nāṣir dn. M. b. Šīrkūh）は，ハラブのアフダースの一団に金銭を与えて支持を求めた［KT 11:517－518］。また，ライース＝サフィーユッディーン（Ṣafīy dn. b. Ṭarza）は，658/1260年にモンゴル軍がハラブを征服した際に，彼らと内通したと言われている［MAB 3:202］。以上の事例は，Ashtor 1958:190－191 にも紹介されている。ただし581年の事例ではディマシュクのアフダースがハラブへ招かれたとされているが，これは誤りである。

35）570/1174年の内乱を伝える史料の中には，アフダースとライースに言及するものがある。しかしそこに現れるライースはハッシャーブ家の人物である［KT 11:415; Cahen 1958–59:19 n. 5］

36）ザンギー朝下のハラブにおけるシーア派の反乱については Khayat 1971:178－191 が詳しい。またザンギー朝・アイユーブ朝時代のハッシャーブ家については，谷口 1996:85－87 を見よ。

37）ザンギー朝からマムルーク朝にかけておこなわれた宗教政策に関わる諸研究については，三浦 1991:108－114 及び Miura 1994:115－120 を参照せよ。

参考文献

AH: Ibn Šaddād, 'Izz al-dīn Muḥammad. *A'lāq al-ḫaṭīra fī ḏikr umarā' al-Šām wa al-Jazīra.* (the volume on Ḥalab). Ed. D. Sourdel. Damascus, 1953.

Azi: al-'Aẓīmī, Muḥammad. *Tārīḫ Ḥalab* (*Tārīḫ al-'Aẓīmī*). Ed. I. Za'rūr. Dimašq, 1984.

Ant: al-Anṭākī, Yaḥyā. *Tārīḫ al-Anṭākī.* Ed. L. Cheikho, et al. Paris, 1909.

BT: Ibn al-'Adīm, 'Umar. *Buġyat al-ṭalab fī tārīḫ Ḥalab.* Ed. S. Zakkar. 10 vols. + index. Dimašq, 1988.

dTD: Ibn al-Qalānisī, Ḥamza. *Ḏayl Tārīḫ Dimašq.* Ed. H. F. Amedroz. Beirut, 1908.

KT: Ibn al-Aṯīr, 'Izz al-dīn 'Alī. *al-Kāmil fī al-tārīḫ.* 12 vols. + index. Bayrūt: Dār Ṣādir, 1979－1982.

MAB: Abū al-Fidā', Ismā'īl. *al-Muḫtaṣar fī aḫbār al-bašar.* 4 vols. al-Qāhira, n. d.

MK: Ibn Wāṣil, Muḥammad. *Mufarrij al-kurūb fī aḫbār Banī Ayyūb.* Ed. Ḥ. M. Rabī' et al. 5 vols. al-Qāhira, 1953－1975.

TDM: Ibn al-Furāt, Muḥammad. *Tārīḫ al-duwal wa al-mulūk.* 9 vols. Ms. A. F. 117－125. Die Österreichische Nationalbibliothek. Wien.

ZH: Ibn al-'Adīm, 'Umar. *Zubdat al-ḥalab fī tārīḫ Ḥalab.* Ed. S. al-Dahhān. 3 vols. Dimašq, 1951－1968.

Ashtor, E. (1956) L'Administration urbaine en Syrie médiévale. *Rivista degli Studi Orientali* 31, 73 – 128.

Ashtor, E. (1958) L'Urbanisme syrien à la basse-époque. *Rivista degli Studi Orientali* 33, 181 – 209.

Cahen, C. (1958 – 59) Mouvements populaires et autonomisme urbain dans l'Asie musulmane du moyen âge, 1 – 3. *Arabica* 5 (1958), 225 – 250, *Arabica* 6 (1959), 25 – 56, 233 – 265.

Havemann, A. (1975) *Ri'āsa und Qaḍā'*. Freiburg im Breisgau.

Havemann, A. (1989) The Vizier and the ra'īs in Saljuq Syria. *IJMES* 21, 233 – 242.

Hillenbrand, C. (1990) *A Muslim principality in Crusader times: The ealry Artuqid state.* Istanbul.

Hoffmann, G. (1975) *Kommune oder Staatsbürokratie ?* Berlin.

Khayat, H. M. (1971) The Šī'ite rebellions in Aleppo in the 6th A. H. / 12th A. D. century. *Rivista degli Studi Orientali* 46, 167 – 195.

Miura, T. (1994) Mashriq. Ed. M. Haneda, et al. *Islamic urban studies.* London et al., 83 – 184.

Salibi, K. S. (1977) *Syria under Islam : Empire on trial 634–1097.* New York.

Sauvaget, J. (1941) *Alep.* Paris.

Väth, G. (1987) *Die Geschichte der artuqidischen Fürstentümer in Syrien und der Ǧazīra'l-Furātīya (486–812/1002–1409).* Berlin.

Zakkar, S. (1971) *The Emirate of Aleppo 1004–1094.* Beirut.

井谷鋼造 (1994) 「大セルジュク朝」と「ルーム・セルジュク朝」『西南アジア研究』41, 21 – 56.

大川原香子 (1984) ヒジュラ暦5～6世紀のアレッポにおける都市自治について『寧楽史苑』29, 27 – 49.

太田敬子 (1986) ミルダース朝の軍隊編成『イスラム世界』25 – 26, 26 – 48.

谷口淳一 (1990) 11世紀のハラブにおけるカルアとマディーナ『東洋史研究』49 (1), 70 – 106.

谷口淳一 (1996) 11 – 13世紀のハラブにおけるウラマー三家系『史林』79 (1), 61 – 94.

三浦 徹 (1991) アラブ (2) マシュリク 羽田正 他 (編著)『イスラム都市研究』東京大学出版会, 79 – 161.

三浦 徹 (1994) ヤクザが生きる町 —— ダマスクス 佐藤次高 他『イスラム社会のヤクザ』第三書館, 117 – 174.

(京都大学大学院文学研究科)